

「益子教会の被災状況と復旧工事、今後のこと」

代務者 平山正道（四條町教会牧師）

あの日の震度は気象庁の発表によると益子町は5強、数字の上ではわたしの住んでいる宇都宮市の6強よりも弱いものでした。しかし、被害は益子町の方がはるかに大きかったように見えます。というのも、宇都宮から30キロ弱南東に位置する益子に向かって車を走らせると、鬼怒川をわたった途端に、ブルーシートをかぶった住宅が目立つようになり、益子に着く頃にはその割合が明らかに増えるからです。古い瓦屋根の家屋が多いことや地盤の関係があるのかもしれませんが。

ご承知のように、益子は国内有数の「焼き物」の町です。しかし、このたびの震災で町内にある39の登り窯が全半壊し、店舗等に陳列されていた陶器も大きな損害を被りました。そのため、恒例のゴールデンウィークの陶器市は会期を短くせざるを得ませんでした。これから先、陶器市は11月にも開かれますが（3日～7日）、いま町をあげてその準備に取り組んでいるところです。

さて、東日本大震災によって益子教会の会堂（築17年）も大きな被害を受けました。内壁に亀裂が多数入り、特に漆喰壁は角の部分がいずれも砕け散るようにして剥落しました。また、南側の外壁に張り付けてあった大谷石のブロックが一部外れて、落下しました。深刻だったのはこの会堂のシンボルでもある塔です。玄関のポーチ部分が、そのまま上に伸びて筒状の塔になっており、最上部の屋根に十字架が立っていました。外側はレンガ風のタイル、内側は漆喰壁です。この塔の内外に亀裂が入りました。特に酷かったのは、内側の壁です。素人目にもこれはいつ剥がれ落ちてくるか分からないと感じるくらい大きなひび割れが発生しました。専門家に調べてもらった結果、長年の雨水浸入により内部構造の腐食が進んでおり改修不能、塔自体の倒壊の危険もあり速やかな撤去が必要とのことでした。それを聞いて、とても悲しい気分になりました。十字架の立つ塔を取り壊す…。会堂の一番大事な部分を失って、会堂が会堂でなくなるように思えました。現在は写真のように、塔は解体、撤去され、その跡にはブルーシートが張り付けられています。痛々しい限りです。しかし、その後の検討の結果、玄関には新たに小さな庇を設置、その上方壁面（ブルーシートの部分）にはタイルを貼って塔を取り外したところを見栄えよく隠し、屋根の最も高いところには元通りあの十字架を取り付けることになりました。総工費は約450万円、教団の会堂共済の見舞金280万円をもとに、教区・教団の支援をいただいて工事が進められています。



一度は絶望しかかりました。教会員の高齢化や転出により、立つか倒れるかというところまで追い込まれている益子教会。礼拝の出席者は3~4名です。いよいよこれで潮時かとの思いがよぎりました。ところが不思議なことに、踏みとどまる道が備えられました。今は益子教会の伝道牧会を助けていただいている西上信義牧師（水戸自由ヶ丘教会）共々、会堂に再び十字架を掲げて宣教の業に参加させていただくことを心から喜び、感謝しています。会堂の屋根に十字架が立っていることなど、普段は当たり前ですが、それがどれほど大きな意味を持っているのか、被災の現実の中で改めて知らされました。栃木地区をはじめ、関東教区の諸教会・伝道所の皆さまのお祈りとお支えに感謝いたします。もうしばらく、今の体制でこの益子の町にキリストの福音を宣べ伝えて、地道に歩んでまいります。

「わたしにつながっていなさい」－手と手を重ねつつ－

竜ヶ崎教会牧師 飯塚拓也

8月24日(水)、幼稚園のホールの壁に一枚の絵が飾られました。高さ3メートル幅5メートルのキャンバス生地に描かれた、675名分の手形が押された大きな大きな絵です。

昨年10月、竜ヶ崎幼稚園は「創立80周年」を迎えました。その記念事業として、画家の藤原由美子さん(卒園生のお母さん)の協力をいただいて、ワークショップ「つながる・つながり－手と手を重ねて－」を開催しました。藤原さんが地と木と空を下絵に描き、80周年のお祝いに集まった一人一人が手形を押して完成させたものです。

実は、この手形を、3月12日(土)に設置する予定でした。しかし、前日の3月11日(金)に発生した「東日本大震災」によって、延期せざるを得なくなりました。



額装を担当した「フナオカ・キャンバス」さんは福島県の業者で、被災されました。一端は、設置作業をあきらめる連絡が届きました。竜ヶ崎幼稚園も被災し、ホールの壁が内側に傾き、天井が壁にぶつかって四隅がつぶれ、至るところ亀裂が生じました。

ようやく工事の見積もりが揃い、工程が確認できたのが7月末。大がかりな工事のため、長期の休みである夏休みを利用し、ホールに足場を組み上げての工事となりました。この状況が奇しくも幸いし、ホールの修復を終えて、工事の足場を活用して、手形が設置できることとなったのでした。それが、8月24日(水)でした。

現在も工事は進行中で、園庭には巨大な重機が入って、斜面の土砂が流失し擁壁が割れて傾いた被害の修復中です。ホールの床が隆起し、来年の春休みに工事する見込みです。地震発生以降、一年がかりの事業となりそうです。資金の見通しも、まだ薄明り状態です。

また、福島第1原発の事故は茨城県南部にも被害がおよび、龍ヶ崎市では、放射線量低下のためにすべての幼稚園は園庭の除染に取り組むこととなりました。

でも、私たちはくじけてはいません。8月24日(水)に、無事に設置した手形を見上げて、フナオカ・キャンバスさんも、私たちも、感無量でした。「東日本大震災」を乗り越えて姿を現した手形は、神さまが私たちにプレゼントして下さったものだと思います。

675名の中には、意識不明の重篤な状態の中で、病院のICUにおじゃまして手形を押し、その後神さまのところに行った卒園生の手形もあります。手形を見上げて、「ここに来たら会えるんですね」と、お母さんがおっしゃいました。

幼稚園は、子どもたちをはじめ多くの方々とつながっています。幼稚園から、園児や保護者が礼拝につながっています。教会にとって、「幼稚園は宣教のフロント」です。

そして、何より「神さまとのつながり」がすべての基盤にあり、この「つながり」は何が起きても断たれることはないことを示されたと思います。

ワークショップの完成に添えられた、藤原由美子さん言葉を紹介しましょう。

小さな手・大きな手・ふくらした手。

手は自分そのもの。心を伝えられるもの。

手と手をつなげて、大きな木を描こう。

長い時間が重なって、たくさんの思いがつながって、

小さな苗木がぐんぐん育つように、大きく木を育てよう。

大切な思いを、たくさんのつながりをつなげて、大きな木を、育てよう。